

佳作

ボタン

遠山 ようこ

幼稚園からの帰り道、女の子はボタンがとれているのに気がつきました。大好きなピンクのブラウスです。

女の子はいま来た道をもどりはじめました。けれども、どこにも見あたりません。

女の子はとほうにくれて、道ばたにしゃがみこみました。

そのとき、女の子の肩になにかがとまりました。

テントウムシでした。

「ぼくじゃ、だめかな」

ボタンのかわりをしてくれるというのでした。なかなかすてきなボタンでしたが、いままでくもっていた空が急にはれて太陽が顔を出すと、テントウムシはすまなそうに言いました。

「やっぱりだめだ。ぼく、おひさまを見るとじっとしてられないんだ」

テントウムシは、女の子の指先まで歩いていき、太陽にむかってとんでいってしまいました。

しばらくいくと、ドングリにいました。

「ぼくでよかったら」

ドングリはくるくるっとまわり、すてきな帽

子をとってぴよこんと頭をさげました。

「ありがとう」

なかなかしぶいボタンです。

けれども、ドングリはなぜだか池を見るととびこみたくなります。

そして、こまったことに池がありました。

ほーら、とびこんじゃった。

こんどは、カタツムリにいました。

「ぼくはだいじょうぶだよ」

じまんの家をゆすりながら、いいました。

「ありがとう」

うずまきもようが、とてもおしゃれでした。

女の子は大よろこびでした。

まさかと思うでしょうが、急に黒雲があらわれて、大つぶの雨がおちてきました。

すると、カタツムリはじっとしていられませんでした。

目を出し、つのを出し、歌いながらどこかに行ってしまいました。

「ねえ、わたしでどうかしら」

かきねごしに声をかけてきたのは、赤い木の実でした。

こんどこそだいじょうぶと思ったのに、小鳥が見つけてたべてしまいました。

それを見ていたマツバボタンがすかさずいいました。

「わたしはどうかしら」

名前もなんだかぴったりで、女の子はうれしくなりました。

けれども、太陽がしずむと花はしぼんでしまいました。

というわけで、市川の町で女の子はまだボタンをさがしています。